

## 人新世の「資本論」

斎藤 幸平 著 集英社新書

2020年9月に発売され、20万部を超えるベストセラーになり、現在も売れ続けている本格的な資本主義批判本である本書が、現在の私たちに何を訴えかけているかを探してみたい。

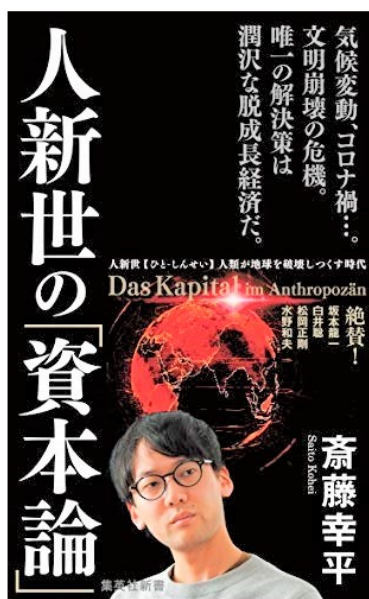
タイトルの「人新世（ひとしんせい）」（Anthropocene）とはノーベル化学賞受賞者パウル・クルツェンの造語で「人類の経済活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくし気候変動を招いて人類を破滅に導こうとしている」時代を指している。

本書が多くのマルクス解釈本と大きく異なるのは**地球の環境危機を前面に押し出していること**だ。

「近代化による経済成長は、豊かな生活を約束しているはずだった。人新世の環境破壊によって明らかになりつつあるのは皮肉なことに、まさに経済成長が、人類の繁栄の基盤を切り崩しつつあるという事実である。」

大量生産・大量消費を基礎とする「帝国的生活様式」は魅力的であり、先進国を豊かにしたが、その裏で、南北問題という呼ばれる事態、すなわちグローバル化によって犠牲を被る地域（グローバル・サウス）や住民を生み出した。資本主義による収奪の対象は周辺地域の労働力だけでなく地球全体に及んでいる。資源、エネルギー、食料も先進国との＜不等価交換＞によってグローバル・サウスから奪われていくのである。人間を資本蓄積のための道具として扱う資本主義は、自然もまた単なる略奪の対象とみなす。

新自由主義が倒れても、資本主義が続く限り「本源的蓄積」は継続するし、グリーンニューディールを推



進しても、経済成長を続ける限り二酸化炭素は削減出来ず、環境破壊は回避できない。

「私的所有や階級といった問題に触れることなく資本主義にブレーキをかけ、持続可能なものに修正出来るとも言うのだろうか。」

「労働を抜本的に変革し、搾取と支配の階級的対立を乗り越え、自由・平等・公正で持続可能な社会を打ち立てる。これこそが人新世の脱成長論である。」

19世紀に生きたマルクスが環境危機による資本主義の限界に気づき、上記の認識に達していたという指摘は私にとってとても新鮮なものに映った。

資本論はマルクスが執筆した第一巻が1867年に刊行された後、未完のまま残され、第二巻・第三巻はマルクスの没後、エンゲルスが遺稿を編集したものである。

ところが第一巻刊行後、マルクスは猛勉強しその研究成果を膨大なノート・書簡・メモ類として残し、それらを本書の著者斎藤幸平が分析した結果、マルクスは**生産至上主義を超えて「脱成長コミュニズム」に到達する**という思想的転換を遂げていたことが明らかになった。

「マルクスが求めていたのは、無限の経済成長ではなく、地球を**コモン(共同体の富)**として持続可能に管理することだった。」

「要するに、マルクスが最晩年に目指したコミュニズムとは平等で持続可能な脱成長型経済なのだ。」

著者はマルクスの脱成長コミュニズムの柱を以下の五点にまとめ、具体的な一つの行動を提起する。

- ① 「使用価値」に重きを置いた経済に転換して**大量生産・大量消費から脱却**する。
- ② **労働時間を削減**して、生活の質を向上させる。
- ③ 画一的な労働をもたらす**分業を廃止**して、労働の創造性を向上させる。
- ④ 生産のプロセスの民主化を進めて**経済を減速**させる。
- ⑤ **使用価値経済に転換**し、労働集約型の**エッセンシャルワーク（必要不可欠な仕事）**を重視する。

そして、**3.5%の人がワーカーズコープ・学校ストライキ・有機農業等でアクション**を起こせば、世界は変わると断言する。